

百人一首カルタを利用した古典学習

菊 川 恵 三

一、はじめに

百人一首は和歌の手引きとして、古典文学の入門として長く親しまれてきた。またそのカルタ（以下、カルタは百人一首カルタを指す）は、正月の優雅な遊びとして広く認知されてきた。中学・高校のなかには学校行事になっているところも少なくない。

しかし一方で、和歌の親しみが薄れ、授業時間数の減少にともなう「学習内容の厳選」が言われるなか、百人一首カルタは「遊び」として国語の授業から遠ざけられているように思う。もっとも、カルタはお正月の伝統的な遊びだといっても、現代の子供達にとって親しいものだとは思えない。現に、大学生の中にもカルタの経験がないという学生もいる。風揚げやコマまわし同様、しだいに童謡の世界だけのものになっているのかもしれない。そんな中で、なじみのない和歌を覚え、カルタを楽しむのは、あまりにも時間と手間がかかりすぎると感じるのも無理はない。古典どころか現代文の読み書きがたよりない学生を前に、削減された時間数の中で従来の学習量をなんとか確保しようと苦勞しているのが、国語教師の現状だろう。

さてここ数年、ゼミ活動・国語科教育研究の一環として、学生達といっしょに中学でカルタを用いた実験授業をおこなってきた。従来のカルタに少し工夫を凝らすだけで、全く初めてという学生から、市内の倶楽部で競技カルタの腕を磨いている学生まで楽しむことができる。ルールを理解するとすぐゲームに参加し、その対戦は白熱するのである。そこで適当なアドバイスをすると、和歌を暗記し

ようとする。「をとめのすがた」だけは取られたくないという、あの思いである。普段の授業ではすぐ顔が下を向く学生が、生き生きとやっている姿を見ると、このカルタを利用することで、古典入門の手がかりになるのではと考えたのである。ただし、そのためには従来の百人一首は何が問題だったのかを明らかにする必要がある。また、古典学習のどこに位置付け、何をどこまで学ばせるのかを明確にしなければならない。本稿では「遊びから学習への連続と転換」に注目しながら、百人一首とカルタの可能性を探ってみたい。

なお、古代和歌の特質に基づいた百人一首の教材としての可能性については、和歌研究の立場から論じたことがある^(注)。参照いただければ幸いである。

二、なぜ百人一首か、どこが問題か

・カルタ大会と暗唱

マンガから和歌の研究者による注釈まで、百人一首に関する書籍は多い。専門書など取り扱っていない小さな書店でも、百人一首なら置いてあることも珍しくない。コンスタントに新刊が出るのも、他の教材にはない特徴だろう。ことに近年、音読・暗唱がいわれるようになると、杉田久信『奇跡の百人一首』（祥伝社）荒木清『百人一首で脳を鍛える方法』（中経出版）のように、暗唱に始まり暗唱に終わるものも珍しくない。

後述するように、私も暗唱は非常に大切だと考える。ただそれを声高に主張するだけではうまくいかないだろう。もしそれでうまくいくなら、これまでも続い

ていたはずだ。ところが現実には、歌の暗唱は少なくなり、カルタでさえも次第に遠ざかっている。それは有名古典の冒頭暗唱も同じだ。「声に出して読む」というだけでは、大人のノスタルジーをかきたてることはできても、子供達にはとどこまい。大切なことは、現代にふさわしい方法とねらいを持って、具体的な教育現場で活用できることだろう。

さて、教育現場での百人一首といえ、真つ先に想起されるのが、正月の「カルタ大会」だろう。小寺慶昭^(せいきょう)は、龍谷大学の教職課程受講者二七一名を対象にした調査をおこない、小・中・高のいずれかで百人一首のカルタ大会を経験したのは全体の七〇%だったとする。そして「国語科の授業で習って印象が深かったというより、学校行事等での取り組みが百人一首を学ぶ大ききっかけとなつていくようである」という。授業というよりは学校行事、勉強というよりは遊び、どうやらこれが現状のようだ。小寺氏もいうように、現状では百人一首とカルタは、その場限りのトピツク的なものであり、国語科の学習として十分意識されていないのである。

ところで、百人一首の暗記とその後の忘却の度合いを詳細に調べたものとして、檀上正孝氏の一連の論考^(ろんこう)は興味深い。これは小学生から大学生まで、暗記力の差、暗記し易い歌、しにくい歌の相違、また一定期間後にどの程度記憶しているかについて調査したものである。学校レベルの差、指導する先生の熱意の差などがあり、そのまま比べられないが、傾向はうかがえる。

まず、記憶しやすいのは小学生では繰り返しが多い歌、耳慣れない言葉がある歌^(うた)だ。一方、中・高生の場合は番号の早い歌、名歌・エピソードを持つ歌^(うた)、わかりやすい四季歌であり、大学生は四季歌より恋や雑の歌が覚えやすいという。また記憶については、小学六年生の時、一生懸命覚えて全員が七割方正解したのに、その後何もしない一年二カ月後には、一割五分に落ちてしまったという。

壇上氏は子供のころの記憶は一生忘れないというのは間違いだったというが、一

生忘れないのは覚えた歌すべてではなく、楽しい記憶と結びついた歌の一部なのだろう。むしろこの結果は、最初に急激に忘れ、次第に緩やかなものになる、記憶の「忘却曲線」そのものだといえる。

さらに中学生になると、丸暗記に強い拒否感を示すことも指摘する。確かに、それはそうだろう。数学・英語など急に難しくなる勉強の中で、意味さえつかめない百首の暗記は苦痛でしかない。檀上氏が「百人一首の暗記は、生徒にとつても、教師にとつてもかなりの負担であり、学校教育の現場でそれを抜おうとすれば、かなりの位置づけが必要である」というのは当然だろう。私達の時代にも、中学高校の冬休みの宿題として百人一首を覚えさせ、休み明けにカルタと課題テストをするのはよくあった。しかし、課題テストだけでは暗記の意欲にはつながらず、散々な結果になって、結局はやめてしまうことが多かったのではないか。

・百人一首の朗読と古典への親しみ

百人一首を用いた授業実践はさまざまに報告されているが、いずれも音読による古典への慣れを指摘するのは興味深い。四倉俊夫^(しんぶ)は、カルタを用いた歴史仮名遣いの指導の実践として次のようにいう。

初めは教師が読んでやるが、少し百人一首になれたところで読み札を生徒たちに交代で読ませるようにすると歴史的仮名遣いの読みはたちまち上達する。同時に、生徒は和歌に親しみを覚え、興味はどんどん広がっていく。

佐藤きむ氏^(きむ)、岩間正則氏^(しんご)などが、「読みなれる」「音から入る」などというのも同じことだろう。

そんな中で、百人一首の音読によって培われた力が、他の古典教材にも活かっていくのを具体的に示しているのが、卯坂洋子^(しんご)である。ここでは中学生に百人一首を次のように指導する。

授業の最初の五分。定期考査ごとに十首。①範読、②解説、③読みの注意、

④ 学生は三回音読、⑤ 暗唱（一分）、⑥ 三回暗唱、⑦ 前日までの暗唱

中高一貫の特徴を生かし、中学一、二年という長時間をかけての音読、暗唱を繰り返すのがうかがえる。これを続けるのはたいへんだらうが、その結果、低学年に音読の効果があるとして、次のように言うのに注目したい。

この百人一首の暗唱は、国語科で五年前から取り組んでいるものだが、それ以前の生徒と比較して、今の生徒は、古典の音読が格段にうまくなった。中学二年生が、教科書三ページにわたる「木曾最期」を、一回下読みしただけで、つかえずに読むようになる。クラス全員が声をそろえて、きれいに読み上げるといふのは、合唱に似た心地よさがあり、読み終わって顔を上げたときの、紅潮した頬を見ると、長い文章ほど達成感があることが分かる。

音読の上達は、単に上手に読めるというのではない。それだけ古語の言い回しに慣れて、文脈がほぼ理解できているということに他ならない。一回の下読みだけですら音読できるなら、表現の細部への注意は届きやすい。以後の授業のやり易さや密度が想像できよう。

百人一首の音読・暗唱を通じて目指すべきは、このような古典全体への波及効果だろう。それは、歴史的仮名遣いや古典文法へもつながっていく。どうやら多くの実践報告は、異口同音にこのことを教えていたようだ。そのような中で、カルタはどのように利用できるのか。次にそれを考えてみよう。

三、「五色百人一首」の特徴と問題

前掲壇上論文では、カルタは暗記の動機付けになるとし、次のように言う。

かるた取りは、百人一首の暗記を短期間で扱う場合、暗記を徹底させることには繋がらないが、その導入として有効であり、歌のリズムや語句の響きを耳から味わわせる方法として有意義である。

確かに、暗記の徹底には継続的なテストは欠かせないが、それをうながすものと

して、カルタは使えるだろう。ただし、一般的な百人一首カルタには問題が多い。現在、百人一首カルタをする時、一般的なやり方は、五六人の班にわけた「ちらし取り」だろう。その場合、次のような問題点がある。

・札が多すぎて時間がかかりすぎる。（1校時に一、二回が限界）

・残り札が二〇枚ぐらいにならないと暗唱したことの効果が現れない。（暗唱することの動機付けになりにくい）

これらはいずれも、一〇〇首という歌数の多さに対する配慮のなさに起因するのではないだろうか。

ところで、東京教育技術研究所の「五色百人一首」という優れたカルタがある。この特長は、一〇〇首を二〇首一組に、五つに色分けしたところにある。これを使うと一回のカルタは二〇首で終わるので、ずっと短い時間で済む。取るべき札がなかなか見つからず、「先生、まって」ということがないので、慣れると一回の勝負が五分になるという。その結果、毎日おこなうのも可能になる。

また、「源平」という二人対戦型が基本であり、勝ち負けがはっきりするため、勝負に熱中しやすい。勝った者同士、負けた者同士が対戦することで、同レベルの者があたるのも容易だ。

このように、「五色百人一首」はすぐれたゲーム性を持っており、生徒の集中力は最初から高くなる。私達のゼミでは、いくつかの小学校、中学校でこのカルタをおこなったが、「源平」が初めてだったにも関わらず、生徒達はすっかりカルタに集中していた。小学生が熱中しているようすを報道した『朝日新聞』の記事が^(注10)あったが、それも納得できる。これを用いれば百人一首の暗記も簡単だといったところだが、そううまくはいかない。どうやらこの「五色百人一首」には、別の問題があるようなのだ。

端的に言えば、このカルタはゲーム性の高さに依存するあまり、しばしば集中力の養成、クラス作りの観点に重点がおかれることである。例えば、小宮孝之「五

色百人一首で学級作り 中学編(明治図書)の波線部に示されるとおり、「中学編」であるにもかかわらず、クラス作りの観点から語られる。そこには学級担任制の小学校と、教科担任制の中学校の基本的な違いが影響しているように思う。

学級担任制の小学校では、毎朝一〇分をカルタのために割くのは担任の判断で容易に可能だが、教科担任制の中学で他教科の先生の同意を取るのには難しい。

中学でも国語の時間の始め一〇分なら可能だが、一つの学年を複数の教員で担当する場合、卯坂論のように国語科全体の取り組みとする必要がある。そのためには、十分な準備と確信がなくてはならないが、それは極めて困難なのだ。

一方、小学校の場合は、個々の教科学習の基礎にクラス作りがある。一時間目から六時間目まで、一人の先生が見ているのだから、それは当然だ。高いゲーム性を利用し、マンネリ化しやすい授業を活性化させるには必然がある。この「五色百人一首」は小学校現場から生まれた、小学校現場に即したものだといえよう。

後述するように、このような小学校での「五色百人一首」は、古典教育の第一歩としてとても有意義だと考える。ただ、それは中学・高校では、国語科学習とつながらなければ遊びでしかない。そして壇上論文よれば、小学時代の記憶も一年半後には一五パーセントになってしまう。

・「セレクト20」の提案

「五色百人一首」をもつゲーム性を生かし、中学・高校の国語科学習に生かすために、特別ダイジェスト版「名歌二〇首」(通称「セレクト20」)の作成を試みている。これは既存の「五色百人一首」ではなく、^(注1)国語教師が百首の中から二〇首をえらび、それをカルタにするのである。製作方法を簡単に記すと次のようになる。

①ボール紙を53ミリ×65ミリに切り、市販の千代紙を折り返して貼る。

②表として下の句をワープロ印字したものを、折り返し部分を隠しながら貼る。

③裏の千代紙に上の句を小さく貼る。

この「セレクト20」には次のような特徴がある。

- ・生徒が自分で自分の分を作り、単語カードのように持ち運びできる。
- ・時間も費用もかからず、紛失しても一枚だけを作るのが容易である。
- ・二〇首の選択は担当教師の自由になるので、その後の利用を考えた選択が可能。

詳しい制作方法や、実際の授業展開については、今後、附属校を中心に実践報告として発表したいと考えている。

ここでの主眼は、カルタを国語科学習と関連付けることである。そのためには、教科書の和歌教材に取り上げられている和歌を意識した選択、また音読・暗唱にふさわしい選択が必要となるだろう。国語教師の目と腕がためられるところでもある。大切なことは、このような教師の主體的な試行錯誤の積み重ねによって、しだいにカルタ遊びが、古典学習の基礎として位置付けられることである。また国語教師にとっても、教材として最初から与えられるのではなく、その後の学習計画とからめ自らが考えることで、成長していくことができるのではないだろうか。

四、国語科学習としての可能性

和歌の学習といえば、音読・暗唱の次に、一首ずつの解釈や修辞の指摘などが求められるだろう。それについては多くの解説書が出版されている。ここでは、もっと全体的なものについて触れておこう。

①仮名遣いの基本

まず、古典の基本としての仮名遣いの理解に役立てることができよう。という

のも、前掲の四倉氏がいうように、歌の読み手をする事で自然と入ってくる。さらに、暗記したものを古典仮名遣いで書けるようになれば、学習の準備はほとんど終わっている。

「をとめのすがた」(僧正遍照)は「を」で始まる唯一の札であり、もっとも人気のある札だけにすぐ覚える。「衣ほすてふ」(持統天皇)を「ほすちよう」、「けふ九重に」(伊勢大輔)を「きよう」と読むのは、おもしろがって覚えるのではないだろうか。ついでに「蝶」が「てふ」であることや、安西冬衛の詩の紹介(注)もおもしろいかもしれない。

このような特殊な仮名遣い以外に、ハ行転呼音にかかわる用例も「逢はむとぞ思ふ」(元良親王)、「香にほひける」(貫之)など多い。また、ワ行の特殊な仮名である「るゑ」は、「からくれなゐに」(業平)、「誰れゆゑに」(河原左大臣)に見える。「セレクト20」の中に、これらの札を入れておけば、それがそのまま歴史的仮名遣いの学習になる。

さらに学年が進んで「係り結び」を学ぶようになれば、「声聞くときぞ 秋は悲しき」(喜撰法師)、「人知れずこそ 思ひそめしか」(壬生忠見)など、百人一首は用例の宝庫になる。中高一貫校で実施すれば、高校の古典文法の学習への橋渡しになるだろう。

②歌の仕組みと理解

これについては、最初に挙げた拙論で論じたので、詳しくはそちらに譲りたい。古代和歌の基本は「四季」と「恋」である。そして、「四季」はそれぞれの季節の景物をどのように歌に取り込むか、また季節の変化をどのような景物でとらえるかが中心になる。知っている歌を中心に、百人一首の季節の歌を順に並べると、さながら季節の写真カタログを見ているようになる。昨今、カラー版の百人一首解説書も多い。そこに掲載された美しい写真をめくれば、梅・桜・稲穂・露・紅

葉・雪と日本的な美がここから出てきたことがわかるだろう。

また「恋」は、恋とは無関係の景物と恋の思いへ転換する歌と、ひたすらの恋心を歌う二種類に注目したい。「あしびきの山鳥の尾の」(人麿)が尾の長さから独り寝の長さへ転換することを教えれば、「岩にせかるる滝川」(崇徳院)、「由良の門を渡る船人」(曾祢好忠)がどこで恋へ変わるのかも想像がつくのではないか。そして、景物と思いを重ね合わせることは、源氏物語や奥の細道など日本文学の基本的な発想として受継がれていく。

もっとも、先にあげた壇上論文にあるように、中学生は季節の歌、高校生は恋の歌に関心をしめすことを考えると、恋歌の理解は高校になってからのほうがいいだろう。

③歌と貴族生活

和歌には当時の貴族達のさまざまな生活や意識が反映している。知識として知るだけではなく、歌をとおして理解することで具体的な肉付けがなされるだろう。そのいくつかを挙げておこう。

・季節に合わせた「衣服と色目」

当時の貴族達の着物は、素材のよき以外に、さまざまな色目を襲(かさ)ねることで成り立っていた。国語便覧などをみると、その具体的な例が挙げられている。そしてその色目は季節の景物の色と対応している。四季歌で景物の話を知った後、色紙でさまざまな襲ねを示し、何を表すかを当ててみるのもおもしろい。(注)

・妻問婚など当時の風習と暮らし

「忍ぶれど色に出にけり」(平兼盛)や「玉の緒よ」(式子内親王)のように、相手を思う気持ちを感じとこらえるのは今も昔も変わらない。これはそのまま、生徒達にも理解できるだろう。しかし、「忘れじの」(儀同三司母)のように、恋の成就の瞬間に相手の思いへの不信を歌うのは、今の私たちには理解しがたい。

男が女のもとに通う妻問婚は、女性にとつてはつらいものだったが、ここにかがえる。

・地名にまつわる独特の風景

貴族達は歌を通じて、地名と景物を結びつけ、それぞれ独特のイメージを付与していった。「難波とみをつくし」・「逢坂と会ふ」のような掛詞を用いたものから、「吉野と桜・雪」・「龍田と紅葉」のように、その風景と結びついたものもある。それを知ること、王朝貴族の発想を理解することになる。

この他、地名ではないが「有明の月」のように、別れの悲しさ・会えない嘆きのような独特のイメージを持ったものもある。

④和歌・短歌の創作や鑑賞文

詩歌の一般的な学習として、創作したり鑑賞文を作ったりするのも有効だろう。佐藤きむ氏は一・二年生の学習を受け、三年では「私の選んだベストスリー」を選ばせ、鑑賞文を書かせている。

創作の場合は、全くの創作以外に、下の句を固定させ、上の句をパロディにする方法もあろう。もっとも、中学生から大学生まで創作活動をやらせてみたところ、恋歌に一番関心を持ったのが大学生。中学生は和歌よりも、俳句のほうが作りやすく、興味をしめした。俳句と比べた和歌の息の長さと、季節が中心の俳句と恋をテーマとする和歌の違いが、そのような差を生むのであろう。

この他、小学生の場合は歌(の一部)にあわせた絵を書かせること、さらには書道と組あわせれば、中・高でも使えるだろう。前掲岩間氏の「架空歌合せ」には驚かされた。こう考えると国語科の学習を越えて、総合学習へのさまざまな可能性も秘めているのがわかるだろう。

五、まとめ

以上、古典入門期における百人一首の可能性を、カルタを中心に述べてきた。まず第一に指摘したいのは、カルタを用いた遊びを暗唱につなげ、それを古典の音読訓練の一つとして位置づけることである。散文と比較した詩歌の特徴が、意味ではなくリズムや響きなど形そのものにあることを思えば、朗読や暗唱は詩歌の理解に直結するだろう。そして、文章を学び始めた小学生にとって、すらすら音読できるかどうかは、内容理解と関わっているように、古文や漢文を学び始めた中学生にとって、それらをすらすら音読できるのは、非常に重要なことだろう。和歌の暗唱は、古典音読の大きな手がかりになるだろう。

歌の内容理解や現代語訳、また枕詞や掛詞といった和歌の修辭や文学史など、試験に関係すると思われる点に多くの時間が割かれるのは無理もない。しかし考えてみれば、そのような方法では、学んだ歌が出題される期末テストはいいとしても、そうでない場合はあまり役立たない。なにより生徒の興味関心を引きにくく、授業が活性化しないのではないか。

教科書に掲載されるわずかな歌を、その場限りで学ぶのではなく、百人一首の名歌二〇首を暗唱し、それを折に触れ持ち出すようにしておけば、その後の古典学習の大きな助けになるだろう。大切なことは、一つの歌、一つの文章を何度も持ち出すことだ。始めはよく分からなくとも、次第に慣れ、最後には「また言ってる」になる。そうなれば、もう忘れない。

現在、小・中・高はそれぞれ切れてしまっており、中学では小学校の、高校では中学の学習が十分受継がれていない。例えば、高校で古典文法を学ぶ時、中学で学んだ現代文法はほとんど省みられない。実に残念なことに思われる。小・中連携、中高一貫が言われるのも当然だろう。

例えば、小学校で「五色百人一首」で歌を覚えた生徒が、中学に入り「セレクタ20」を学ぶ。名歌二〇首の限定された音読・暗記が容易なら、内容理解へシフトすればよい。みてきたように、一首ごとの内容理解を通して他の歌とつながっ

ていく。そして高校に入れば、文法や語彙に利用され、また歌のあれこれの学習が自然と平安文化への理解に発展する。そのような学習のなかで、未知の古典文学の読解力が少しずつ向上する。小・中連携、中高一貫で目指すべきなのは、そのような学習ではないのだろうか。

今、小・中・高でそれぞれ重点を置くべきものを表に示せば次のようになる。

| | 小学 | 中学 | 高校 |
|-------|-----------------|----|----|
| カルタ遊び | ◎ | ○ | △ |
| 暗唱 | ○ | ○ | ○ |
| 内容理解 | × | ○ | ◎ |
| 発展学習 | 絵画、色目、 創作、歴史 | | |

(◎は最重要、○は大切、△はできれば、×必ずしも必要でない)

ただし、人間の発達がそれほど単純でないように、小学生でも内容理解が可能な者もいれば、高校生でもカルタ遊びから始める方がよい場合がある。むしろさまざまに組合せ、単調にならないようにするのが肝要なのではないか。

内容理解は早い段階では求める必要はない。和歌のリズムや響きは声に出すことでしかわからない。それを思えば、暗唱や朗読が和歌に親しむ最も身近な方法なのである。大切なのは、それを声高に叫ぶことではなく、現在の状況にふさわしいものとして、百人一首を大胆に組替えてゆく、しなやかで強靱な方法ではないだろうか。

1 これまで発表した拙論として次のようなものがある。これらはいずれも和歌の表現構造に注目し、考察したものである。

・「和歌文学教育の試み(二)——万葉・今古のものと心——」(名古屋大学国語国文学) 64号、平1・7)

・「教材としての『百人一首』(二)——和歌文学教育の試み(二)——」(和歌山大学教育学部紀要(人文科学)) 40集、平3・2)

2 「教材としての『百人一首』(二)——和歌文学教育の試み(三)——」(同) 41集、平4・2) 小寺慶昭「国語教育の中の百人一首」(『小倉百人一首を学ぶ人のために』世界思想社、一九八・一〇)

3 壇上正孝他「古典文学教育の研究と実践(2)——『百人一首』暗記力の実態、大学生の場合——」(『広島大学学校教育学部紀要』3巻、一九八〇)以下、「高校生」「小学生」「中学生I、II」(同4巻1・7巻、一九八一—一九八四)

4 繰り返し多い歌——「10 これやこの」「51 かくとだに」、面白い言葉を含む歌——「20 わびぬれば」「74 うかりける」「75 ちぎりおきし」などが挙げられている。

5 岩間正則氏(注7)が横浜国大附属中学生の好きな歌として紹介した次のような歌とも一致する。

24 このたびは——道真との関係(清少納言「夜をこめて」や源実朝も)

3 足引きの——リズムのよさ(滝の音は、「住江の」も)

33 ひさかたの——内容がなんとなく理解できる(「忍ぶれど」も)

61 いにしへの奈良の都の——気になることは「けふ」

60 大江山——エピソードが面白い

6 四倉俊夫「もっと親しみやすい古典の授業のために」(『月刊国語教育』二〇〇〇・一〇)

佐藤きむ「『小倉百人一首』を軸とした古典学習」(『実践国語研究』20号、一九八〇・七)

8 岩間正則「『百人一首』の教材化にむけて」(『横浜国大国語教育研究』12号、二〇〇〇・五)

9 卯坂洋子「中高一貫校における百人一首の活用」(『月刊国語教育』二〇〇三・二)

10 「朝日新聞」(二〇〇二・二二二三日付)に「移りにけりな……かるたの色」の見出しで、大

阪府和泉市黒鳥小学校での様子が紹介されている。

11 現行「五色百人一首」の五つの分類は、歌番号(時代)、性別(女性・男性・僧侶)、名歌の

いずれの分類でもない。むしろ、それらがバラバラに分類されているようにみえる。これは色による偏りを、意識的になくしているようだ。それは百首を覚えることを前提にした措置なのだろう。

12 「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた。」(「春」(軍艦菜利))

13 この色紙による色目の提案は、平成16年度の「中等国語科教育法」で学生が提案し、附属中学校で実践したものである。色目から紅梅・紅葉・雪を当てさせるほか、色紙を与え自分の季節の色を作らせた。白と青の夏など現代的な感覚でさまざまな色目を作り、楽しい授業になった。

二〇〇五年十月十二日受理